

常に自分の先の姿を想像しながら 行動してほしい

J2 ジェフユナイテッド市原・千葉
通訳 小田晋太郎さん



ゲリア(左)へのインタビューの橋渡しをする通訳の小田晋太郎さん

オーストラリア人DFゲリアのサポート担当

ピッチ内外で手助け
選手の家族の生活も

小田さんは千葉で通訳を務めて2年目となる。スペイン語と英語を話し、現在は主に英語を使ってオーストラリア人DFゲリア(27)のサポートを担当。その内容は練習、試合での選手、監督、コーチ、スタッフとの対話やインタビューの橋渡しといったピッチ内はもちろん、銀行、病院などの付き添いや学校の手配といった選手や家族の日常生活の手助けなど、ピッチ外まで多岐にわたる。

「選手も監督も感情はパフォーマンスやチームの結果によって変わります。結果が出ていない時などはより選手や監督の感情の変化に敏感になる必要があります。そういった時こそ通訳の役目は重要になりますし、やりがいを感じることが多いです」と目を輝かせる。目標は「チームが強くなること。強い組織になることに貢献すること」だ。

バルセロナ遠征刺激
スペイン語専攻留学

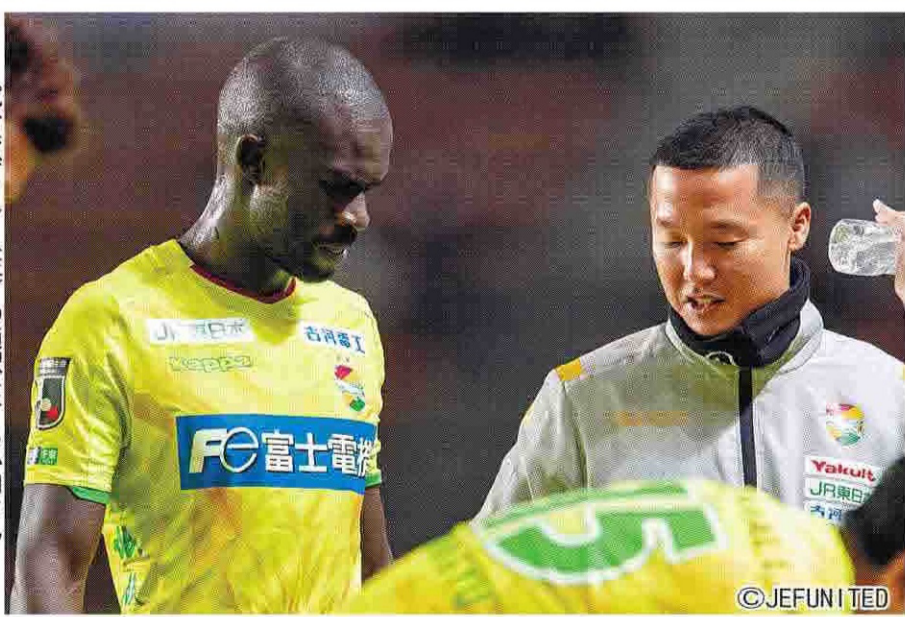
小学生の頃から「漠然と海外への憧れがありました」と話す。中学2年の時、所属していた三井千葉サッカークラブ(現ヴィットリアスFC)でスペイン・

「結果が出ていない時こそ選手や監督の感情の変化に敏感に」

◆小田晋太郎(おだ・しんたろう)
1995年(平7)2月2日生まれ、千葉県市原市出身の25歳。幼稚園からサッカーを始め、千葉敬愛高ではDF、MFとしてプレー。通訳を目指し進学した神田外語大学ではイペロアメリカ言語学科でスペイン語を専攻。商社勤務ののち、プロ野球・ロッテの通訳を経て19年からサッカーJ2千葉の通訳として活躍。

した。大学ではスペイン語を専攻し「一から文法を学べたことが良かったです」と英語学習にも力を入れた。3年秋から8カ月間、留学で再びバルセロナへ。バルセロナ自治大学の語学学校に通いながら、私生活では現地のサッカーチームに通訳として所属し、日本人選手のサポートを経験することで、語学力、コミュニケーション能力に磨きをかけた。

「凄くいい経験になりました。現地に住まないといけないニュアンスや言葉の使いまわしを学ぶことができました」と振り返る。シェアハウスでは韓国人、ナイジェリア人とともに過ごし、英語でも会話。英語



試合でゲリア(左)の通訳をする小田さん

「接する人のバックグラウンドに興味を持つことが大切」「サッカーの話ができれば良いわけではない」

にも磨きをかけた。留学を含めた大学4年間で得た教訓は「接する人のバックグラウンドに興味を持つことが大切で、その知識がないと信頼関係は生まれない」ということ。現在、千葉で担当するゲリアはオーストラリア人だが、両親はアフリカのウガンダ人。「彼とのコミュニケーションではウガンダがどういう国か知ろうとする視点が大事。彼がなぜウガンダ出身の両親を親に持つオーストラリア人なのか、ということ。ただサッカーの話ができれば良いというわけではないのです」と力説する。

商社からプロ野球へ
ロッテで通訳経験も

大学では歴史や文化、人類学なども率先して学び、環境、人種、政治問題などにもアンテナを張り巡らせた。大学外でも、スペインのバルセロナやレアル・マドリードと言ったサッカークラブが日本で行うスクールなどの通訳で経験を積み、人脈を築いた。

卒業後はコーヒー豆を扱う商社に就職したが、通訳への思いは持ち続け、18年6月からプロ野球・ロッテの通訳に。19年から地元を本拠地とする千葉での通訳の仕事を得た。

学生時代から「志を持って」行動を続け、自身の夢へとたどり着いた小田さん。夢を持つ高校生に向け、「ただ目の前のことを楽しむだけでなく、常に自分の先の姿を想像しながら行動してほしいなと思います」とメッセージを寄せた。

「自分の経験を生かして海外に関わる仕事」を目指し夢実現